ラジオNIKKEI

マルホ皮膚科セミナー

2023 年 9 月 11 日放送

「第 86 回　日本皮膚科学会　東京支部学術大会 ③

教育講演　２－２　疥癬の簡単な診断方法　」

赤穂市民病院

皮膚科部長　和田　康夫

今回、疥癬の簡単な診断法というテーマでお話をいたします。診断の鍵は、疥癬トンネルです。疥癬トンネルは、ヒゼンダニの住処です。疥癬トンネルさえ見つかれば、その中から虫体が見つかります。

歴史上、ヒゼンダニを見つける達人がいました。1800 年頃の達人を４人紹介しましょう。

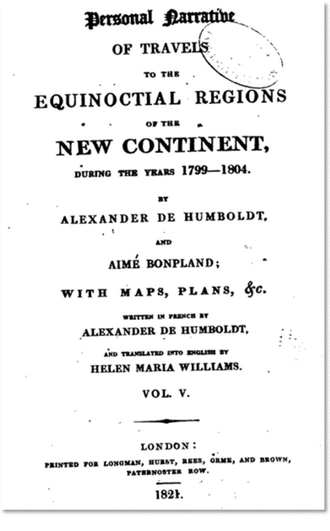
Personal Narrative
OF TRAVELS
TO THE
EQUINOCTIAL REGIONS
OF THE
NEW CONTINENT,
DURING THE YEARS 1799—1804.
BY
ALEXANDER DE HUMBOLDT,
AND
AIMÉ BONPLAND;
WITH MAPS, PLANS, &c.
WRITTEN IN FRENCH BY
ALEXANDER DE HUMBOLDT,
AND TRANSLATED INTO ENGLISH BY
HELEN MARIA WILLIAMS.
VOL. V.
LONDON:
PRINTED FOR LONGMAN, HURST, REES, ORME, AND BROWN,
PATERNOSTER ROW.
1821.

図１　フンボルト(1821)　『新大陸赤道地方旅行』

フンボルトが出会った祈祷師

１人目は、南米の祈祷師です。博物学者フンボルトは、南米を探検中に疥癬に罹ってしまいます。そのとき出会ったのが地元の祈祷師です。フンボルト著『新大陸赤道地方旅行』の一節からです（図１）[1)]。

「1800 年５月１日。ヤビタの修道士は愛想のいい思慮深そうな人物だった。一行は彼の家に、四，五日の間止宿しなければならなかった。舟を陸路ピミチン川まで運ぶにはそれだけの日数が必要だったのである。私たちはこの間を利用して周辺の土地を訪れると共に、数日前から悩まされていた病の治療を試みることにした。手の甲や指の関節に非常な痒みを感じていたからである。宣教師によれば、これは「アラドル」すなわち「耕す虫」と呼ばれる昆虫が皮膚に入ったためであるという。拡大鏡で確認すると、確かに皮膚の上に畝のような白っぽい縞模様が幾筋も見える。この模様のために、この虫は「耕作者」の名を与えられていたのである。私たちのために一人のムラートの女が

呼ばれた。この女は「クランデラ」と呼ばれる土地の祈祷師兼医者で、「ニグア」、「ヌチェ」、「コヤ」、「アラドル」といった、人間の皮膚を蝕む小動物のことなら何一つ知らないことはないと称していた。女は私たちを悩ませている虫を一匹ずつ追い出すのだと言って、先をとがらせた硬い木片をランプの火で焙り、この木片でもって皮膚の上にできた畝を穿り始めた。長いこと穿った末、女は有色人種に特有の重々しい口調で一匹の「アラドル」が見つかったことを告げた。見るとコナダニの卵と思しき丸い小さな嚢があるばかりである。」

フンボルトはこのように記しています。疥癬のニックネームは、「耕す虫」。皮膚の下に畝のような白い筋を残すとあります。

ジョセフ・アダムスが出会ったダニ掘り名人

２人目はマデイラ諸島のダニ掘り名人です。英国人医師ジョセフ・アダムスがマデイラ諸島に渡り診療をしているときに、ダニ掘り名人の老婦人に出会います。ジョセフ・アダムスの書より抜粋します（図２）[2)]。

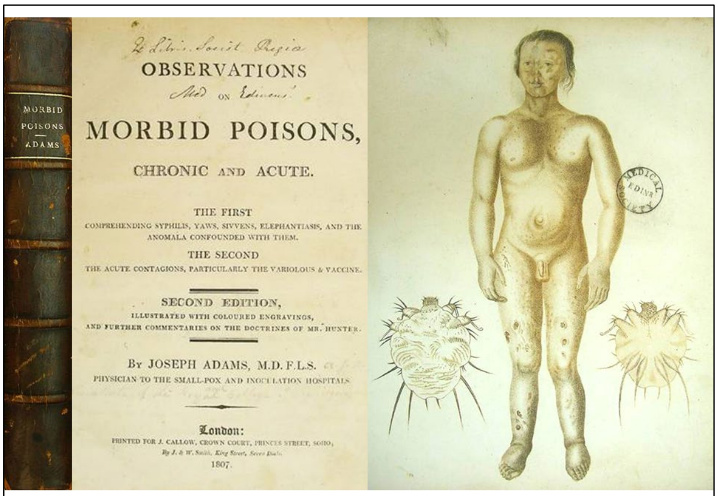

図2 アダムス(1807)『慢性急性の病毒の観察』ヒゼンダニ図

「1801 年 7 月、一人の老婦人が姪を連れてやってきた。老婦人は、眼鏡なしに、造作もなく２匹のダニを姪から掘り出した。老婦人は、そのダニを私の手にのせた。２時間後、ダニはいなくなっていた。しばらくの間、自覚症状はなかった。けれども３週間以上経ってから、頻回にかゆみに襲われるようになり、さらに２週間経たないうちに、腕やおなかに多数の発疹が生じた。困った私は老婦人のもとを訪ねた。彼女は私の腕からダニを２匹たやすく掘り出した。私の体には水疱がたくさんでていたが、彼女はいつも、水疱とは違った場所からダニを掘り出した。彼女が何を目印にしているのか、私には分からなかった。ただ水疱部にはいつも目もくれず、水疱は虫の住み家とは考えていないようであった。彼女は、ダニの掘り出し方を、決まってこのように教えてくれた。”水疱部は、いつも無視すること。6mm ほどの長さで、やや節々のある筋が見つかったら、そのはじっこに盛り上がりがあります。この盛り上りの下をルーペで見ると、虫が見つかります。虫がいるのは、この筋のはじっこだけです。もし、この場所に虫がいなければ、探すのはあきらめること。”」

カザール

３人目がスペイン人医師カザールです。皮膚科医なら、「カザールの首飾り」で聞き覚えがあるかもしれません。ペラグラの皮膚所見を版画に残した人物です（図３）。1762 年にカザールは、疥癬をこのように記載しています[3)]。

図3 カザール(1762)『アストゥリアス公国の自然医学史』ペラグラ図

「疥癬患者では、特に手足の皮膚の下に、ヒゼンダニ（sirones)がいる。この地域では、aradores「耕す虫」　と呼ばれている。その理由は、ダニは表皮と真皮の間に住んでおり、ウサギのように掘り進み、細長い地下道(cuniculi)を残すからである。明るいところで見ると、通り道がはっきりと分かる。このダニによって引き起こされる痒みや不快感は信じがたいものがある。慣れた人は針先でダニを掘り出すことができる。平らな机に置くと、動くのが見える。ダニを押しつぶすと、血液ではなく透明な液がでてくる。」

サイモン・レヌッチ

４人目を紹介しましょう。イタリア人医学生サイモン・レヌッチです。1834 年、レヌッチは、フランスのサンルイ病院で研修を受けていました。当時サンルイ病院では、20 年以上にわたり論争が繰り広げられていました。疥癬の原因となるダニが存在するかどうかについてです。フランスでは、生きたヒゼンダニを見た人は、誰一人としていなかったのです。サンルイ病院の院長アリベールは、カザールの書物を読み、ダニがいると信じていました。ダニを発見した人には懸賞金がかけられていました。けれども、20 年以上にわたり本物のダニを見つけた人は誰もおらず、ヒゼンダニは伝説上の幻の生き物でした。1834 年 8 月 13 日のこと。医学生レヌッチは、アリベールが診療中に、若い女性患者から生きたダニを掘り出して自分の爪にのせました。これが疥癬のダニですと、アリベールのところに見せに行きました。爪の上で動き回るダニは、肉眼でもはっきりと分かり、居合わせた誰もが驚嘆することとなります。レヌッチの出身は、地中海のコルシカ島です。コルシカ島では、住民同士が、ダニを掘り合うという風習がありました。レヌッチは小さい頃から、それを見ており、ダニの掘り出し方を知っていたのです。レヌッチは、翌年 1835 年に、疥癬についての学位論文を出しました（図４）。

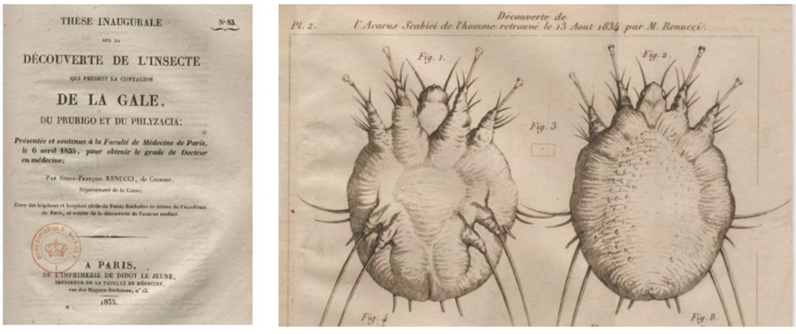

図4 レヌッチ(1835)『疥癬の伝播を起こす昆虫の発見に関する学位論文』ヒゼンダニ図

その中で、ヒゼンダニの掘り出し方について、具体的に記しています。このようにあります[4)]。

「溝(sillons)の端っこに、白い点もしくは黒い点が見つかったら、ダニがいる確証となる。そのような点が見つかれば、約１mm 手前から白点に向かってピンや針を用いて表皮に穴を開ける。穴を深く開けすぎてはならない。ダニが傷ついてしまうからである。ピンや針の先端は、白い点の下をくぐるようにする。そうするとダニをすくい上げることができる。ダニの外見は、甲羅の中に頭があるようで亀によく似ている。まだ誰も言っていない極めて大事なことは、白い点を探し、その位置を見定めることである。ヒト疥癬においては、ダニは水疱の中には決して見つからない。」

この４人の話に共通しているのは、線状の皮疹です。フンボルトは、「畝のような白っぽい縞模様」と述べています。マデイラ諸島のダニ掘り名人は、「節々のある筋(knotty line)」、カザールは、「細長い地下道(cuniculi)」、レヌッチは「溝(sillons)」と記載しています。

この線状皮疹は、現在、疥癬トンネルと呼んでいるもので、ヒゼンダニの生涯の住処です。疥癬トンネルが見つかれば、そのはじっこから、虫体が見つかります（図５）。

おわりに

最後に、現在の達人を二人ご紹介します。一人は、ダーモスコピーのスペシャリスト田中勝先生です。田中先生は、ダーモスコープをのぞきながらヒゼンダニを生け捕りにするのに長けた先生です。もう一人は高知県の猿田隆夫先生です。２００８年、まだダーモスコピーが一般的ではなかったころに、猿田先生はこのように書かれています 5)。

「疥癬の診断にダーモスコープはきわめて有用である。熟練を要することもなく、慣れることでほとんどの症例に応用できる。慣れてしまえば顕微鏡検査をする必要もないほどである。」

疥癬の簡単な診断法のまとめです。疥癬トンネルを探して、そのはじっこを、ダーモスコピーで観察しましょう。慣れると猿田先生のように、ダーモスコピーだけで診断がつけられます。応用編として、田中勝先生のように針でダニを掘り出すとよいでしょう。上手くいけば、ヒゼンダニを生きたまま採取できます。疥癬をぜひご堪能くださいませ。

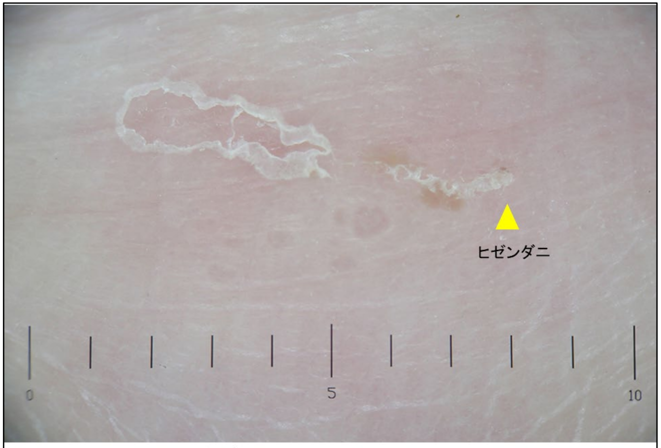

図5 疥癬トンネルとヒゼンダニ
線状皮疹（疥癬トンネル）の端にヒゼンダニが住む。白い体に黒い口が目印。

参考文献

1)Humboldt, Bonpland: Personal narrative of travels to the equinoctial regions of the new continent, during the years 1799-1804. , London, 1821. (邦訳　フンボルト『新大陸赤道地方旅行　中』大野英二郎、荒木善太訳, 岩波書店、２００２年)

2)Adams: Obervations on morbid poisons, chronic and acute., London, 1807

3)Casal: Historia narural y medica del Principado de Asturias, 1762

4)Renucci: These inaugurale sur la decouverte de l'insecte qui produit la contagions de la gale, 1835

5)猿田隆夫：疥癬対策パーフェクトガイド（南光弘子編)、2008 年

「マルホ皮膚科セミナー」
https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/